

仙林寺だより

NO. 63
編集・発行
松田正貴

行事報告

寺庭研修会

五日より一泊二日の日程で東京西麻布にある永平寺別院の研修会に参加しました。



仙林寺だより八月号でもお知らせした通り、ここは弟子裕好さんが上山した修行道場、その師寮寺（出身寺院）関係者を対象にした研修会です。銀座線表参道の駅を降りて、フアツシヨナブルなビル街を抜けるとそこは娑婆の喧騒とは無縁とも思える静寂さに包まれた別天地。別院とはいえ、御山永平寺の空気がここには流れている、そんな不思議な有難さを感じたことでした。尚事老師（お寺の事務や涉外担当の老師）のこやかなお出迎えを頂き、日程説明の後、早速達磨講式（達磨大師の徳を讃えて命日の十月五日に営む法要）に随喜です。まさに少数精鋭、大衆威神力（皆でする修行ゆえに現れる力）の素晴らしさでしょう。時四更（午後四時）を過ぎた頃、薬石（夕食）を頂きます。三心に裏付けされた細やかな心配りが感じられるお膳は、典座和尚様はじめ菜頭寮の皆様が前日から用意されたとの事、あらためて命を頂く有難さを感じます。夕食後の維那和尚様（雲水の指導役）の僧堂説明では、

子供さんを心配する親心に配慮しながらも、今この時をいかに充実した一日としてゆくの、親御さん共々の修行を説かれます。（寺院の子弟が多いため）開枕（消灯）前の懇親会では、本山でお世話になった老師方との思わぬ所での再会。お蔭様で懐かしい方との貴重な語らいのひと時を過ごす事ができました。二日目の朝は、暁天坐禅、朝課如常、綿密な差定（日程）に身を任せる安心感に永平寺修行時代を思い出しました。分単位のスケジュールで過ごした二日間、最後はそれぞれのお弟子さんとの茶話会の時間がもたれまじる裕好さん、人の三倍やらないとついでゆけません。指導役の和尚さんは、真面目さと努力はしっかり見ているようです。緩やかな歩み、緩歩（かんぼ）の積み重ねで十分です。あせらずゆっくり参りましょう。帰り道、町並みを眺めて思うことは、拝金主義偏重の異物、六本木ヒルズを目前として己自究明の日々をおくる。慕古の思いの中に、バランス感覚に優れたこれからの僧侶を育てる。古き因習に埋没しない前向きな僧堂の姿を見ることが出来たようなそんな意義深い研修でした。

頭陀寺晋山式

先月号、『晋山式ならし』でお知らせした通り今回は本番です。晋山式とは、住職として正式にお寺に就く為の儀式で、僧侶としては一世一代の大作持（お寺での行持は事ではなく持）です。師僧様を早くに亡くされた新命和尚（新住職）は若干二十五歳、大本山総持寺で修行を終えたばかりのいわばお坊さんのルーキー、試合のメインイベント（上堂）は他山の僧侶との問答、百戦錬磨の手ごわい

相手を次々と打ち取って行かなくてはなりません。試合終了後、お立ち台（須弥壇）での勝利者の雄叫びかと思いきや、謙遜の言葉、感謝やお礼のメッセージ（白槌師）からお褒めの言葉をいただければ、ダッグアウトへと。次にマウンドに上がるときにはいつも先発、しかも二番手（和尚）からエース（大和尚）に昇格です。プライベートではブルペンにはすでにバッテリーを組むお相手（伴侶）もお待ちとの事。リーグ優勝を遂げた今、日本シリーズもすでに手中にあるようです。さて、晋山式に併せて修行されるのが結制（けつせい）とは、お釈迦様の教えを元に僧侶が一所に集い修行する事を言います。新命和尚（新住職）を監督に例えれば、知客（しか）副寺（ふうす）書記（しよき）と呼ばれるようなコーチ陣を揃え、その他それぞれの塁を任せる大勢の選手（僧侶）と共にキャンプに入ります。その昔は聖地インドの雨安居（うあんご）修行にならぬその期間も九十日に及んだものですが、現在はご本山を除き、一般寺院ではその形式だけが伝えられているものです。ところでそのキャンプの中、選手のチームリーダーとなるのが首座（しよそ）で、監督に代わりキャプテンが指揮を執るはじめての他流試合が首座法座、問答を戦わせる事から首座法戦式（ほつせんしき）とも呼ばれます。今回このお役をつとめられたのが新命住職の弟さん、またその補佐弁事（べんじ）にも三男があたり、まさに嬉しい三つ巴。重ね重ねのお祝いに半座を分けたお釈迦様も破顔微笑の二日間でしたでしょう。

寺子屋「芋煮会・手提げバック作り」

二十八日、朝から花火があちこちであがり始める。いやな予感が……。秋のこの時期は行事が重なり参加者が少ないのが残念。ですが、盛り上がり人数とは必ずしも比例しません。今年の芋煮は一味違う。カレーパーティの登場。札幌名物スーブカレーを髣髴させる出来に思わず感動、茹でたうどんとの相性もまた格別でした。ご相伴の住職も七十？年の人生で始めて味わうカレーうどんに黙って「おかわり」。寺子屋の案内を「カレーうどんを食べる会！」にすれば参加者も増えたかと、今になって悔やまれます。手提げバック作りは、子供たちそれぞれの感性で自由に落書き。はじめは戸惑っていた男の子も、ちよつとしたヒントで独創的なバッグ作家へと変貌を遂げます。中には電氣量販店の広告を見ながら35%、100%、10000%と数字の羅列を試みる小さなデザイナーも。食事の後は、遠く新潟の寺子屋ファンから贈られたお菓子をお土産に解散となりました。次は十二月の餅つき、またまたボランティアのご父兄にご協力をいただくことになりそうです。花火があがらない事を願って。



ひんじゅ

「談合」

「うつくしまふくしま」実は美しくなかつた腹の内。「建設会社社長宅家宅捜査か？」「前知事の弟が関与起訴処分」。そしてついには元知事逮捕！ キヤッチフレーズよるしく福島が一年で最も美しい季節を迎えるこの時節、紙面を賑わせる話題は来る日も来る日も談合の話題、東京地検特捜部が狩りに来たのは山の紅葉ではなかつたようでまことに残念です。そんな灰色な話題はひとまずお休みしまして、時は霜降を過ぎても山々の彩りはいよいよ本番、錦織りなす紅葉の風情はまさにこれからが秋本番といったところでしょうか。ところでこの「秋」の漢字を調べてみますと、五行説では「金」を配し、それに伴う色で言えば「白」、方位は西を表すとあります。因みにこの五行説とは、中国の古くからの哲学。人間が生きていくうえにおける、天地に対する畏敬・尊敬・自然崇拜をあらわした考え方で、宇宙の万象はすべて「木・火・土・金・水」の五つから構成されているとするものです。「木」は「火」を生み、「火」は燃えて「土」に還る。「土」の中にはさまざまな「金属」が含まれ、その「土」をくぐって「水」が生まれ、その「水」が「木」を育てる。全ての成り立ちはこの循環を離れるものではないとする思想です。さて、権力という名の森に木を植える事で、その木は時を経るごとに大木となり、山奥にあつては自然発火をするなどして、次々と周りの木々まで燃やし尽くしてしまうのでしょうか、そして燃え尽きた木は灰とな

り土へ戻り、やはり金属を生む。次に生まれる金属は、剥がれ易い鍍金にコーティングされたものではなく、真物であつてほしいと思うのは、森を遙かに眺める者のささやかな願いです。ある関連番組の中で「被害者の顔が直接見えないから、犯罪意識が低いのです」とのコメントがありました。これでは、誰も見ていなければ盗っていい。の論理と同じではないでしょうか。道元禅師示して曰く「独りを慎む」悪しき慣習に流されることなく自分自身をごまかさず生きてゆく。誰も見ていないひとりのときこそ自分を正す勇気が大切という教えでしょう。また同じ番組の中で、前宮城県知事浅野氏へのインタビュー「談合を無くすのはやはりかなり難しい事なのでしょね？」「そんな事はありません、正しい入札にすれば済む事ですから」眺める木々の無知という液肥も、特定の森の木を大きく育ててしまった要因であるのかもしれない。「善縁にあえば心良くなり、悪縁に近づけば心悪くなるなり。我が心もとより悪しと思ふ事なかれ。只善縁に随うべきなり」正法眼蔵随聞記

お知らせ

寺務所玄関に大輪の花を咲かせた菊の鉢花がお目見えです。十二丁目清野隆弘さんが丹精込めて育てられました。お寺にお出での際は是非ご覧下さい。